～先進理工学部～ 若手研究者の声

物理学科　助手　長岡　央さん

（2014 年度 若手研究 B 採択）

助手に着任した年度に科研費を応募しました。科研費を獲得しておくと、研究の幅が広がります。また、今後の研究者としてのキャリアにも、研究費を自分で運用するという経験はよい影響があると考えました。

前もって申請書の構成は漠然と考えておいて、申請書そのものは 1 週間程度で書き上げました。研究室のスタッフの方や教授に申請書を見せ、 さらに大学で実施している添削指導システムを活用することで、 申請書を洗練させていきました。

私は部品購入や出張（海外学会等）で主に科研費を使用しています。 学内予算だと海外出張には不十分になりがちですので、研究の幅が広がったと感じています。

若手研究 B は 2 度までしか採択されないという制限がありますので、 若手研究 B が終了になった後は、今の研究を発展させて、 より大型の若手研究 A に応募したいと思います。

応用物理学科　助教　吉岡　潤さん

（2015 年度 若手研究 B 採択）

自分の研究は基礎研究なので、企業のファンド等の研究費と比べると科研費の若手研究 B が一番採択率の高い研究費でした。(若手研究 B の採択率：約 30%)

研究費が沢山あり、研究費に困ることがない研究室もあるかもしれませんが、使用にあたっては先生にお伺いを立てなければならないかと思います。その場合、自分が思い切ったチャレンジをしたいと思っても、言い出しにくい、または先生も忙しいので、なかなか相談することができず実行できない、というケースもあるかと思います。個人研究費もありますが、私は実験系なのでそれだけでは足りません。そのような時、自分の裁量で自由に使用できる研究費があれば、自分の考えで研究を進められると思い、科研費に応募しました。

作成期間は構想から完了まで約 1 が月かかりました。一度申請書を作成すると、たとえ不採択になったとしても次何かに応募する際のたたき台として使えるので、応募資格があるなら応募することをお勧めします。

化学・生命化学科　助教　菅谷　知明さん

（2013 年度 若手研究 B 採択）

私は前任機関の任期最終年度に若手研究Bに応募しました。現職の採用時には科研費採択が決まっていなかったので、現在研究室で行う研究テーマと科研費のテーマは少し異なります。その為、科研費テーマは前任機関で実験を行うことが多いですが、研究を進める上で困ったと感じたことはないです。

助手や助教は独立した研究者として自分のテーマを持っていてもおかしくないと思うので、一人の研究者として研究費を獲得し、自分の研究テーマを遂行していくのは当たり前のことだと考えています。

科研費の申請書作成には構想から1か月程度かかりました。若手の間はどうしても指導教員が行っている研究内容と重なってしまうところがあると思いますが、その内容に＋αのオリジナリティをいかに加えるかがポイントだと思います。

また一度申請書を作れば、他の研究費や助成金などに応募する際の基礎になるので、様々な用務で忙しいかもしれませんが、早い時期に一度作成することをお勧めします。

応用化学科　助教　瀬下　雅博さん

（2015 年度 若手研究 B 採択）

科研費を獲る前までは、自分の研究と深い関わりがなさそうな海外学会は、先生に相談することなく自主的に参加を諦めることがしばしばありました。科研費があると、このような海外学会にも行くことができるようになり、参加することで研究の幅が広がるのではないかと思っています。

科研費の申請書作成は研究推進部 HP に公開されているモデル調書を参考にしながら構想から約 1 か月で行いました。

任期最終年度の場合、科研費応募時点では次年度のポストが未定のため申請書を書きにくいという声もありますが、たとえ他機関に移っても研究設備を借りることは可能かと思います。科研費は採択後、交付申請書という書類を提出しますが、そこには研究計画を書く欄があります。応募時と異なる環境になった場合も、採択時点の計画を書けば問題ないです。

人事採用の応募フォームに外部資金獲得実績を書く欄を設ける大学も多いので、将来的に大学等で研究を続けたいと思うのであれば科研費には応募するべきかと思います

生命医科学科　助教　藤枝　俊宣さん

（2013 年度 若手研究 B、2015 年度 若手研究 A 採択）

初めの頃は、応募してもなかなか科研費に採択されませんでしたが、色々な工夫をすることで採択されるようになりました。確かに、不採択になった申請書と採択になった申請書を見返して比べてみると、強調の仕方や構成が大きく異なると感じます。例えば、概念図だけでなく、予備実験で得られた写真やグラフを申請書の中に盛り込むだけで、申請書に説得力を持たせることが出来ます。

若手研究 B の場合は、研究業績が少ない場合でも、採択されるチャンスは十分にあります。仮に採択されなくても、次年度以降の応募に役立てることができますし、文章を作成する訓練やこれまでの研究を振り返る良い機会にもなります。

とは言え、なかなか自分独自の切り口を考え、申請書を書くことは難しいものです。しかし、遅かれ早かれ独立した研究者として、オリジナルな発想のもと研究費を獲得していかねばならないのですから、早い段階からチャレンジしておくことで訓練にもなりますし、決して悪いことはないはずです。

電気・情報生命工学科　研究員（助教）

（2014 年度 若手研究 B 採択）

私の研究は実験系ですので、どうしても試薬や機器が必要となるため、自ら主体的に研究をするには自分で研究費を獲得する必要を感じ、応募しました。

若手研究 B 以外にも科研費に採択された経験があります。その申請書では研究実績が比較的少ないかな、と思いましたが、採択されました。研究業績のみが重要ではなく、研究内容の提案が明確であれば、採択の可能性の上昇が期待されます。リターンを考えると、業績にとらわれずに積極的に応募した方が良いと思います。

特に、着任になった直後（科研費の応募資格を得た直後）は研究活動スタート支援(4 月下旬頃締切)に応募できますし、それが不採択になっても、若手研究 B に応募できます。

更に言うと、若手研究 B が不採択となっても、審査結果が一定以上ならば特定課題 B という学内の助成金が交付されます。多くのチャンスがあるということは、今後研究をしていく上で知っておいて損は無いと思います。